

甘 諸 之 礎



尾崎神社

西 日本の海岸地方、島嶼は水田となる平地が少なく、長い間さつまいもが広く栽培され、大切な主食・副食となってきましたが、広島県に残っている「豊田郡誌」によると、天和3年（1683）に生口島・因島・高根島など、同郡下の島々にはじめて琉球いもの種を配付し、植えたとの記録があります。誰がどのように手配してさつまいもを入手したかは、はっきりしておらず、果たしてその後栽培に成功して広く普及したかはわかりません。大三島（伊予国、現愛媛県）出身の下見吉十郎が薩摩から種いもをひそかに持ち出し、故郷ではじめて栽培したのが正徳2年（1712）で、それまでは大三島はじめ近在の島々でも、さつまいもがつくられていなかったところを見ると、仮りに天和3年の導入が事実であったとしても、この作物の特性、栽培法などを熟知していなかったために、普及することなく途絶えてしまったのかもしれない。

安芸・備後（現広島県）の沿岸・島々では享保年間（1716～'36）から昭和のはじめ頃まで、さつまいもは常食とされてきましたし、大正期以後経済が好転して、米麦食がかなり普及したのちも、さつまいもが大切な食糧であったことには変わりません。

さつまいもは、普段は蒸して食べるほか、コメ・

ムギを混ぜて炊いた「いもごはん」にもしました。ときには祝い事の折に「いも餅」もつくられたようです。これはモチゴメとさつまいもを、だいたい等量の割合でつくられることが多く、せいろでモチゴメが蒸し上るころ、上にさつまいもを載せ、軟くなるまで一緒に蒸し、これを臼に移して搗くと、淡黄色の「いも餅」ができ上り、まるめてきな粉をつけて食べていました。

秋に収穫されたさつまいもは、暖かい部屋の床下につくられた貯蔵むろに入れておくと、翌年の春から初夏の頃まで食べられますが、これらがなくなる初夏から秋の新しいもができるまでの間の食糧としては、「かんころ」が大切に扱われていました。これは、さつまいもの生切り干しで、薄く輪切りにしてむしろに拡げて天日乾燥したもので、収穫してから1～2ヵ月程経って正月前頃につくると、早く乾燥して甘味も強くなりました。これを袋に入れて貯えておき、生いものなくなる時期にアズキ、コメと混ぜて炊いたり、粉にして団子、うどんなどをつくりました。

古 くから作られていたさつまいもですが、耕作者はいつも、より味のよいもの、たくさんとれるもの、貯蔵のきくもの、がつくりたいとの希みが強く、これらの情報を得たときには、早速その種類の種いもを入手するために、たいへんな努力をしたことでしょう。

安芸国ばかりでなく、広く西日本のさつまいも生産に大きな福音をもたらしたのは、「源氏」「七福」の導入で、この両品種は戦中までかなりの面積でつくられ、昭和15年（1940）には源氏は全国作付の38%、七福は8%と、この両品種ではほぼ半分を占めていました。

これらの優れたさつまいもは、広島県安芸郡矢野村出身の久保田勇次郎氏によって日本に導入されました。明治の中期以降、とくに西日本各地から海外への移住が増加しましたが、久保田氏もあちらで事業を興そうとの一念で、明治26年（1893）

オーストラリアに渡りました。この国（当時は英国領）のどの辺りかは不明ですが、気候風土の異なる地での仕事、暮らしに適應するのは容易ではなく、間もなくその年の夏に脚氣にかかってしまいます。しかし、彼の地でさつまいもを食べることによって病も癒え、おかげでこの食物に対する関心も深くなって、これを故郷にひろめたいものと思い、同28年夏に数個のいもを持ち帰って栽培し、出来たものを近隣に分け与えた、といわれます。

このいもは作りやすく、土地を選ばず、とくに広島県の瀬戸内のように乾燥するところでもよく出来、しかも貯蔵しやすいという、たいへん優れた特性をもっていましたので、たちまちのうちにこれら地方をはじめ、同じような条件の地帯へとひろまっていったことでしょう。はじめイギリスいも、次いで三徳いも、さらにのち元気あるいは源氏とよばれたこのいもは、とくに西日本に広く普及し、最大の栽培面積を占めるに至りました。

雄飛の志をもつ久保田氏は、オーストラリアから帰国したのち米国に渡り、そこでイタリア人の栽培していたさつまいもを食べ、あまりの美味しさに驚き感動して、同33年（1900）にこれを持ち帰って故郷で栽培しましたが、これまた、どのような風土にも適し、作りやすく、貯蔵性があり、食味がよい、など、よいとこづくめのいもで、やはり西日本に広く普及しました。アメリカいも、メリケン白などとよばれ、のち七福と命名された、この米国から持ち帰ったいもは、貯蔵後に一層甘く美味になるため、栽培者ばかりでなく、消費者にとっても、それ以前に導入された源氏よりも、あるいは喜ばれたかもしれません。

矢野村はその後町制を敷き、さらに広島市に編入されましたが、同市安芸区矢野西、JR呉線矢野駅のすぐ前の小高い丘の上に尾崎神社が鎮座しています。神功皇后・応神天皇ほかの祭神が祀られている、この由緒ある社は、昔は少し離れたところにはありましたが、慶長年間火災で焼失したのち現在地に移されました。地元の人たちの信仰を集めているこの社の下に、源氏・七福

両品種を導入した久保田勇次郎氏の功績を顕彰する「甘藷之碇（碇はいかりの意）」が建立されています。大正4年（1915）、11人の発起人によって設けられたこの碑の表面には、「七福芋者一名亜米利加芋明治三十三年本村久保田勇次郎氏従北米合衆國齋歸其味甘美……」とあり、アメリカいもを導入し普及した功を讃えています。源氏導入についての記述はありませんが、これは七福のほろがその価値を高く評されているためか、源氏は、あるいはそれと異名同種のものがすでに各地にあったためか、その理由は定かではないものの、氏が持ち帰った源氏がその地方ばかりでなく、広く日本のさつまいも作に大きく貢献したことは、まぎれもない事実であります。（編集部）

